が印度最古の美術でない事は確かである。何か火影を認める太古以來、印度には、假令極めて幼稚であつたにしても、裝飾美術があり、その多くの象徴を佛教徒が依用したのは、既知の事實で、蓮や輪の如き往古から使つてゐたもので、何等佛教徒の爲に案出されたのではない。要するに、初期佛教徒がその塔の周圍に彫刻を施すに至つた事情は、恰も、ロマの初期クリスト教々團が相當の數に達し富力も集むる事を得て、其墓所に色彩の贅を示すに至つたその事情と軌を一にする。この何れの場合でも、新宗教の教徒は之が爲に、畫家なり彫刻家なり、その求め得た美術家に依らざるを得なかつたものではあるが、此等の美術家は、恐らく自身クリスト教徒でもなく佛教徒でもなかつた事とも考へられ、兎も角彼等は、之まで始終作つて來たものを續けるより他に道はなかつたものといへる。全く在來の題材を早速に變へて了ふ事は、彼等美術家には不可能だからである。ロマの畫家が、始めに、鴿や碇の如き在來の標章を新しい概念に用ひたり、或は、オルフュスや「良き牧者」の如き像でクリストを現はしたが、之と同じ調子で、印度の彫刻家は、その親しんでゐ